



げんでん芸術新人賞

げんでんふるさと大賞写真コンテスト

敦賀の文化と歴史「港の繁栄と敦賀の文化」

施設のご紹介「越前古窯博物館」

ふくい伝統行事「妙泰寺の七福神祭り」

令和7年度げんでん芸術新人賞

当財団では、平成11年度から、将来を大いに期待できる活動を行っている県内在住の新人芸術家にげんでん芸術新人賞を贈呈しています。令和6年度までに35名の方々に贈呈しており、第18回となる今年度は、竹沢 友里さん及び山村倫代さんのお二人に贈呈しました。

令和7年11月30日（日）に敦賀市本町のげんでんふれあいギャラリーで授賞式を行い、受賞者のお二人に、当財団の坂井理事長が記念楯をお渡ししました。

【受賞の言葉】

竹沢 友里さん《洋楽（ピアノ）》

この度は身に余る褒賞をいただき、誠にありがとうございます。私は本当に周りの人に恵まれていて、そのお陰あつての受賞だと思います。そして、「より険しい山を登って参れ」という叱咤激励を受けているようで、身が引き締まる思いです。まだまだ「新人」ということだそうですので、初心を忘れず、音楽の力で福井の幸福により一層貢献してまいります。

山村倫代さん《工芸（七宝焼）》

この度は、げんでん芸術新人賞という栄誉ある賞をいただき、心より感謝申し上げます。このような素晴らしい賞を贈ってくださった選考委員の皆様、これまでご指導くださった先生方、そして応援してくださっている方々に、深く御礼申し上げます。今回の受賞を励みに、七宝焼の普及に、より一層努めてまいります。



受賞者と来賓の皆さん

目次 59

- 令和7年度げんでん芸術新人賞…………… 2～3
- 第19回げんでんふるさと大賞
2025写真コンテスト…………… 4～5
- 敦賀の文化と歴史
「港の繁栄と敦賀の文化」…………… 6
- 施設のご紹介「越前古窯博物館」…………… 7
- ふくい伝統行事「妙泰寺の七福神祭り」… 8～9
- 越前若狭の文化活動…………… 10
- 情報ファイル…………… 11



公益財団法人げんでんふれあい福井財団は、福井県の文化振興とふれあいとゆとりのある地域づくりに寄与することを目的に、県民の皆様との絆を大切にしたいと広報誌を目指します。

表紙の説明『妙泰寺の七福神祭り』（南越前町）

南越前町西大道の日蓮宗の名刹妙泰寺では、毎年9月の敬老の日に「七福神祭り」が行われています。今から237年前の天明8年（1788）の飢饉による災害防除を祈念して始まったとされ、現在も午前中は各集落を七福神が招福を願って回り、午後から住職による法要、保存会の面々の七福神踊りの奉納と、美々しい稚児の参拝などもあり、檀家や近在からの見物客で大変にぎわいます。



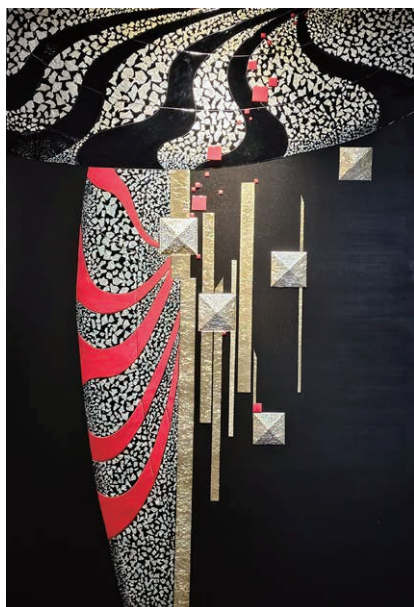
（写真撮影：吉田 俊雄さん）



「ルビーカフェ」での様子



「出張音楽堂」公演の様子



天長地久
(令和7年度日本現代工芸美術展
現代工芸本会員賞)



時流 II
(平成29年度福井県総合美術展
福井県知事賞)

洋楽 (ピアノ)



竹沢 友里さん
(福井市)

スズキ・メソッドにて5歳からピアノを始め、東京音楽大学、同大学院を修了。東京音楽大学伴奏助手、芸大・音大予備校の講師などを務め、ソロはもとより、アンサンブル・ピアノリストとして、数多くの団体やアーティストと共演を重ねてきた。

平成21年には、福井県新人オーディションに合格するとともに、日本アンサンブル・コンクールでは優秀演奏者

賞及び全音楽譜出版社賞を受賞し、平成22年には全日本合唱コンクール(伴奏)で金賞を受賞している。

一方で、公益財団法人 福井県文化振興事業団が運営する「越のルビーアーティストバンク」の登録アーティストとして、長年、県内の中学校や特別支援学校での「出張音楽堂」のコーディネートや音楽家を志す中高校生を対象とした「ルビーカフェ」の出演に併せて、福井県立道守高校の非常勤講師として教鞭を執るなど、後進育成にも努めている。又、OTO NO HAとして、お別れの場での献奏を行っている。

工芸 (七宝焼)



山村 倫代さん
(大野市)

生きる気力を失っていた平成18年、福井駅前の「ふくい工芸舎」に展示されている七宝焼の指輪に心惹かれる。その指輪の作者である日芳隆子さんに師事。

初期はハートのモチーフを多く取り入れた柔らかな印象だったが、近年は原色を使った力強い作風。作品も大型化し、金箔と銀箔を多用したきらびや

かさも特徴の一つとなった。

平成21年の福井県美展初入選を皮切りに、知事賞など数々の賞を受賞。平成29年には日展初入選を果たし、令和2年以降は連続入選している。日本現代工芸美術展では現代工芸賞などを、令和7年は現代工芸本会員賞も受賞し、福井県を代表する七宝焼作家の一人となった。

地元大野にアトリエを構えて制作を進めつつ、七宝焼の魅力を多くの人に知ってもらおうと、令和5年には、制作体験や大作を鑑賞できるスペースがあるギャラリーを自ら開設し、七宝焼の普及にも努めている。

第19回げんでんふるさと大賞 2025写真コンテスト



海、見上げる

小湊 義則さん（福井市）

「水中写真」は本展では初めての応募ではないでしょうか。見た瞬間、未体験でありながらどこか懐かしいような感覚が呼び覚まされます。人と岩以外には生き物のいない海中世界。地上では体感することのない光の表情が新鮮で魅力的です。わずかにブレた人体のシルエットと岩壁との対比が、不思議な浮遊感を生み、静謐で幻想的な雰囲気を引き出しています。

（講評：金津創作の森 館長 野田 訓生さん）



ふるさと賞



水しぶき全開

水嶋 雪月さん（福井商業高校）

総 評

審査委員長 写真家
水谷内 健次さん

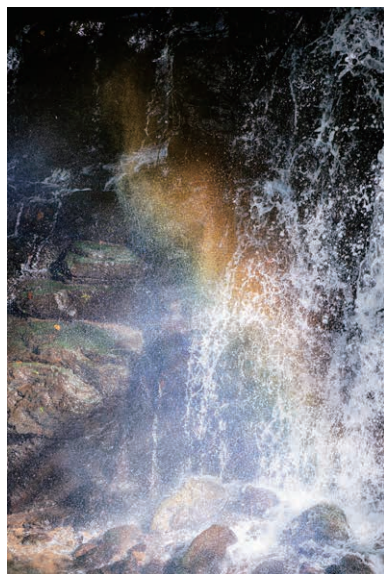
今年は、特にテーマを設けずの募集でした。広く「ふるさと福井の自然・歴史・文化等の地域資源」を題材にしての応募となり、多様な作品が集まることとなりました。また、出品者が数を絞り込んで応募したことで、力作ぞろいとなりました。その中で、大賞の『海、見上げる』は水中をゆらゆら漂う姿とごつとした岩との対比が印象的な作品です。その他の受賞作も構図や色彩を工夫することはもちろん、写真がもつ可能性に挑戦するなど、意欲作が並びました。これからも独自の視点で被写体を見つけ、ふるさとの良さを伝える作品を生み出していくことを願います。

ふるさと福井の自然・歴史・文化等の地域資源を題材にした写真コンテストを行いました。

【応募総数】104名 190点

【表彰式】令和7年11月30日（日）

優秀賞



虹の水煙

井上 優さん（高浜町）



おちゃらけ

青山 拓さん（丹生高校）



水中綱引きへ

栗野 和美さん（小浜市）



生と死

八木 こうめさん（金津高校）

協賛社賞

福井県カメラ商組合賞



お花畑のチョウチョたち

市村 宣和さん（福井市）

富士フイルムイメージングシステムズ㈱賞



一瞬の永遠

織田 慶史さん（福井市）

㈱フジカラー北陸賞



光の彩り

中村 欣吾さん（福井市）

※入選者の方々のお名前は、当財団のホームページに掲載しています。
<https://www.genden.or.jp/honor>



受賞者と来賓の皆さん

敦賀の
文化と歴史

港の繁栄と敦賀の文化

敦賀は北陸・日本海側に位置しながらも波穏やかな湾を抱え、古くから天然の良港として栄えてきました。陸では京へとつながる輸送ルートが整備され、古代から海陸交通の結節点として北国と京畿とを結んできました。

交通の要衝である敦賀の地では多くの人や物が行き交い、みなとまち独自の文化が育まれました。井原西鶴は『日本永代蔵』（元禄元年（1688））の

中で敦賀を「北国の都」と称しましたが、江戸時代、敦賀の港は北国と上方とをつなぐ物資の中継地点として繁栄しました。特に、海運業を担った敦賀の有力商人たちは経済的な力を発揮しただけでなく、地域の文化振興にも貢献しました。彼らは歌や書画などに親しむ文化人であり、そして歌人や書家、絵師など当時のクリエイターたちを支えるパトロンでもありました。そうした支援者の存在によって、「北国の都」の文化は一層華やいなのです。

敦賀の絵師の多くは江戸や京で絵を学びました。江戸時代前期を代表する敦賀の橋本長兵衛は鷹の絵で知られ、2代目の鷹画は小浜藩酒井家から徳川家に献上されており、3代目は江戸幕府の奥絵師・狩野探幽の下で絵を学んだとされています。同じく小浜藩抱え絵師の中村幽甫もまた狩野探幽に学びました。江戸時代後期は京の絵師た

ちの活躍が目覚ましく、写生画を大成した円山応挙を祖とする円山・四条派が与えた影響は絶大なものでした。内海三代（元孝・元紀・吉堂、中村西溪、鳴海鶴陰、石垣東山、今村公龍など敦賀を代表する絵師たちも円山・四条派に入門しています。京の影響が色濃い点は、地理的にもアクセスしやすい敦賀の特徴の一つと言えるでしょう。

京で学んだ後は地元敦賀へ戻って町絵師として活躍する者が多く、今でも市内の神社を中心に彼らの作品が伝わっています。その中でも、今村公龍は幕末に活躍した敦賀の絵師で、氣比神宮にかつて存在した「敦賀港図大衝立」（戦災により焼失）で知られています。代表作とも言える大衝立が失われていた公龍でしたが、近年氣比神宮から公龍作の大幅風が発見され、敦賀港の繁栄とともに語るべき重要な資料として注目されています。

また、京の絵師が来敦して制作した作品がいくつに残っており、敦賀の人々と交流していたことが想像できます。来敦した絵師には、鈴木松年や塩川文麟などがいます。鈴木松年は明治に活躍した絵師で、豪放な作風が特徴です。慶応3年（1867）に父百年とともに来敦しており、その際に長岡屋清兵衛の求めに応じて描いた「山姥図屏風」（真禅寺蔵）は若書きながら

独特の迫力があります。今村公龍や内海吉堂の師匠で、平安四名家の一人に挙げられる塩川文麟は、敦賀の廻船問屋山上宗助と親しく、敦賀では山上家の屋敷に長逗留し、同家の菩提寺である善妙寺に2mを超える墨画の釈迦像を奉納しました。

空襲を受けて街の8割が焼けた敦賀ですが、敦賀ゆかりの絵師の活躍や、敦賀人と京の絵師とのつながりを示す資料が現在まで残されているのは大変貴重なことです。様々な時代の苦難を乗り越えて伝えられてきた資料は、敦賀の文化が港の繁栄とともにあったことを語ってくれています。

（敦賀市立博物館
学芸員 加藤敦子）

掲載画像

- ・〈上〉鈴木松年「山姥図屏風」
慶応3年（1867） 六曲一隻 真禅寺蔵（敦賀市立博物館寄託）
- ・〈下〉今村公龍「松に鶯紅葉図屏風（大松之絵屏風）」嘉永4年（1851）頃 六曲一双 氣比神宮蔵（敦賀市立博物館寄託）



施設の
ご紹介

越前古窯博物館

こよう

越前町

県内の文化的施設をご紹介します。

越前古窯博物館は、平成29年（2017）に新たに越前陶芸村敷地内に開館した博物館で、越前焼研究の第一人者である水野九右衛門氏が収集した福井県陶磁器資料（水野コレクション）を中心として、水野氏の功績を讃えると共に越前焼の価値や魅力を発信しています。



施設全景

当館は4つの施設から構成されており、約60年前に水野氏が私費を投じて宮崎村熊谷（現・丹生郡越前町熊谷）に開館した水野古陶磁館を移築・復元した展示施設である『資料館』を中心に、敷地内には江戸時代に建てられた水野氏の自宅を移築・復元した『旧水野家住宅』や、数寄屋建築の大家・中村昌生氏設計の本格的な茶室『天心』

堂』『天心庵』も併設されています。

『資料館』の中核を為す「福井県陶磁器資料（水野コレクション）」は40年以上にわたる研究生活の中で蒐集した陶磁器、写真、フィルム、古文書等が含まれる資料です。福井県内のやきものの変遷がたどれる価値の高いものとして、平成22年（2010）に国の登録有形文化財（美術工芸品）に指定されました。

資料館1階では平安時代から近現代までの越前焼を見ることができ、水野氏が蒐集した各時代の優品を展示しています。時代順に展示されているので、越前焼の主力である壺や甕などの形状や、釉薬の変化などが分かりやすく見



資料館1階

ことが出来ます。明治時代以降には磁器や色絵陶器などへの展開もあり、多種多様な越前焼をご覧いただけます。

資料館2階では水野氏が実際に研究で使用していた部屋の再現やカメラ等の遺愛品、研究ノート等を展示しています。晩年、水野氏が研究の集大成として古窯の復原・焼成を行った際の壺も展示しており、隣接する福井県陶芸館ではその窯の実寸大の模型も展示しておりますので、是非合わせてご覧いただきたいと思います。

併設する『旧水野家住宅』は、水野家が代々村方役人を務めていた家柄であることを示すように堂々とした建物です。当住宅の主座敷からは



旧水野家住宅

「天保六年（1835）」の墨書が見つかっており、明治時代には屋根を茅葺きから二層葺瓦葺へと改修を行っています。田の字形に並ぶ和室や一段高い仏間などの後世の改変が加えられていない間取りで、丹生郡越前町の山間部の伝統的な様式を今に残しています。その文化財的価値が認められ、こちらも平成30年（2018）に登録有形文化財（建築物）に登録されました。現在では、来館者の休憩所として利用していたくほか、季節に合わせたイベントなども積極的に開催しています。

『天心堂』は茶の湯を通して日本の文化を西欧に伝えた郷土の偉人・岡倉天心にちなみ、越前焼を含む、福井県の伝統工芸を振興する核のひとつとして整備されました。立礼式の茶室で、講演会やイベントにも活用しています。草庵茶室『天心庵』は本格的な小間の茶室で、毎年秋にはこの天心庵・天心堂・旧水野九右衛門住宅の座敷を利用して大規模な「天心茶会」も開催されています。

六古窯のひとつとして認められる越前窯。その中心地に築かれた越前古窯博物館は、福井県陶芸館などとともに、今日も越前焼の振興に力を注ぎ続けています。

（越前古窯博物館

主査（学芸員）森まどか）

妙泰寺の七福神祭り

南越前町

日蓮宗大谷山妙泰寺縁起

南越前町西大道の西方山麓にある、日蓮宗の大谷山妙泰寺は名刹の古寺として知られています。『南条郡誌』によれば永仁元年（1293）日蓮上人の法孫、日像上人が佐渡国より能登の七尾海岸に着岸し、日蓮の新宗布教の遺命を尽くすべく、巡教の旅の途中に越中の羽生八幡の社僧の妙文が、日像により改宗し授戒を受け、共に上洛の途次、隣村の脇本にたどり着きました。日像が京都へ向かった後、当地が甲州身延山に似ており、旧称脇本上村の当所を定めて翌年の永仁2年（1294）3月下旬に日像を開山として当寺を建立したとされています。

日像は後醍醐天皇の命を受け京都に妙顕寺を建立、妙泰寺はその末寺となります。本尊は十界大曼荼羅。

当寺は「北国見延」と称されるように、越前日蓮宗最初の根本道場として知られ、『越前国名勝志』によれば後世日像の門流四か聖跡とされた古刹で、福井藩主結城秀康の祈禱寺でもあり、寛文3年（1663）には松岡藩主の松平昌勝から寺地一七・八六石の寄進を受けました。いわば菩提寺同様の扱いを受けてきたことになります。

さすがに名刹の名の通り、周囲に

多くの七堂伽藍の堂塔をめぐらし、壮観でしたが、近世以降は本光坊・善光坊・本因坊・法泉坊・修善坊・立本坊・林照坊・法性坊・貞俊坊の九塔頭のみとなっています。広い境内には、七面堂・三光堂・妙見堂や松平家の墓地もあり、広大な檀家の墓地や、裏山の山頂（標高308メートル）には奥の院があり、春夏2回の祭礼祈願が行われます。裏山の境内の鳥居をくぐると七難を避け七福を授ける七面大明神（七面天女）を祀る七面堂があり、当寺の守護神とされています。南方の宇殿庭、殿奥の杣山の山中には南北朝時代の新田義貞方の武将瓜生保の一族が築いた瓜生城があります。敦賀の金ヶ崎城を守護せんとして櫓曲で戦死しました。

七福神祭り

さて、「明神会^{みょうじんえ}」とも呼ばれる、妙泰寺の「七福神祭り」は檀家らでつくる保存会の尽力のもとに、毎年9月の第3日曜日の翌日（敬老の日）に開催されています。七福神祭りは、『南条町誌』によると天明8年（1788）当時飢饉や災害が続き、世相の安定、人心の安穩を祈願して、当時の住職と村びとが厄除けの為に七福神に扮し、七難即滅、七福即生を期して村内

を巡ったことに始まるとされています。祭りの前夜には本年の豊かな収穫を祝って盆踊りが盛大に行われ、当日午前中に各集落を七福神が招福を祈って回ります。トラックに「招福来訪」の看板を掲げているように、いわば来訪神行事の要素を秘めているのです。地元の伝承では、毎年祭りの頃に、七福神は裏山の七面堂から里へと降りて来られると伝えられていて、まさしく来訪神そのものです。

猛暑が続く中、午後1時から檀家や区民、見物客、子どもたちが広い境内に集まり、出店も立ち騒然と混雑する中で、保存会の面々が演じる七福神が登場し、子どもたちとおのおののじゃれ合い、じゃんけんをしたり記念撮影をしたりして、華やか、賑やかに参拝客や見物客と交流。

ちなみに、「七福」とは「仁王般若經」によれば「七難即滅七福即生」に由来し、「法華経普門品」の「七難七福」を意味しているとされ、室町時代末期に七福神信仰が成立したと考えられています。

七福神とは大黒天（福德の神）、恵比寿（清廉の神）、弁財天（愛敬の神）、寿老人（寿命の神）、福祿寿（人望の神）、毘沙門天（威光の神）、布袋（大量の神）を指し、このうち大黒天、弁財天、毘沙門天はインド仏教の渡来の

神、寿老人、福祿寿、布袋は中国の道教の神、恵比寿は日本の神話上の漁業や商売の神とされています。また、大黒天は出雲大社に祀られている大国主命（大己貴命）とも重なり、いわば日本古来の恵比寿・大黒が現世利益的な七福神として仲間入りしていることになります。なお、大黒さんは越前地方にアイノカミサンとして祀られている田の神の一面も持っています。

ちなみに、琵琶を抱えた紅一点の弁財天（弁天さん）は芸能の職能神としても知られ、日本では吉祥天とも同一視されています。寿老人は人の寿命を司る南極の星座の寿星（カノープス）を人格化したものとされ、道教の三つの徳を具備した福祿寿と同一人物。甲冑に身を包み、左手に塔を、右手に宝棒を持って、仏法を守護する毘沙門天は北方守護の任を担う最強の四天王として七福神のなかでもひととき異彩を放っています。唯一実在の布袋は中国の唐代末期の禅僧の布袋和尚とされ、楽天的な生き方が理想化したものとも言われています。このように、いずれも庶民の現世利益の願いが込められた、言わば民俗神の要素を秘めてもいるようです。

法要と七福神の奉納踊り

その後、午後2時半ごろから、露払いとして猿田彦大神やお福、やつこ（奴）、獅子によって先導された七福神の一行が正面の本堂に集合。十数人の各寺から参集した法門の僧侶たちの真摯で熱狂的な明神会法要と、美麗な

稚児行列、参拝が行われ、笛・太鼓・
簞箆などの雅楽が奏でられ、大黒天、
恵比寿、弁財天、寿老人、福祿寿、毘
沙門天、布袋の順に、優雅な七福神に
よる奉納踊りが順次行われて、本堂で
の盛大な法要が終了となります。奉納
踊りの振り付けは50年ほど前に竜笛の
作曲家によってつくられました。

その後、3時半ごろに山上の七面
堂へ七福神、ご神体に乗せた御輿、ご
供物、稚児7名と参詣者が行列をつく
り、七面堂で、おそかに住職による読
経が行われて、厄払いをこめた本年の
七福神祭りをすべて終え、村里はいよ
いよ収穫の秋を迎えます。

(日本地名研究所

所長 金田久璋)

参考文献

- ・『福井県南条郡誌』(南条郡教育会)
- ・『南条町誌』(南条町教育委員会)
- ・『福井県大百科事典』(福井新聞社)
- ・『日本歴史地名大系18 福井県の地名』(平凡社)
- ・『角川日本地名大辞典18 福井県』(角川書店)
- ・『北国見延 日蓮宗大谷山妙泰寺七福神祭り(明神会)』(采・同保存会)



境内の風景



子どもたちと触れあう布袋さん



お稚児さんの参拝



本堂での法要



毘沙門天さん



寿老人さん



弁財天さん



大黒さん

越前若狹の文化活動

様々な文化団体等の活動に助成・協賛を行いました。

高浜七年祭

高浜七年祭が、令和7年6月15日（日）から21日（土）まで、高浜町の佐伎治神社で開催されました。この祭は、京都の祇園祭と同様に御霊会の性格を持っており、御霊や疫神を慰撫することを目的に、旧高浜地区全域の氏子が営む佐伎治神社の式年大祭として、巳年と亥年の7年（実質的には6年）ごとに行われるもので、織豊期の連歌師里村紹巴の紀行文「天橋立紀行」（永禄12年（1569））に「高浜祇園会」とあるように、この頃に起源をもち、約400年の歴史があります。

中山、西山、東山の3基の大きな神輿が町内を巡幸します。芸能には、太刀振り、お田植、神楽などがあり、又、

曳山6基では、若連中による「屋台囃子」や、子どもたちによる「日本舞踊」、「太鼓の演奏」が演じられました。訪れた人々は、歴史の重みを感じつつ、6年に1度の貴重な経験に魅了されました。



敦賀音楽祭 おぼろっく2025

敦賀音楽祭 おぼろっく2025が、令和7年9月13日（土）から14日（日）まで、敦賀市のきらめきみなと館、敦賀市民文化センターの2ステージに加え、地元市民らによるつながりステージの合計3ステージで開催されました。この催しは、北陸新幹線敦賀開業を契機とした民間主導のまちづくり事業として開催されたものです。敦賀の食・文化・人にも触れてもらえる地元密着のフェスが街に根付くことを目指して令和6年度から開催されているもので、今年で2回目の開催となりました。

全国各地から敦賀への誘客が期待される催しで、北は北海道、南は九州まで、又、年代も幅広い方々が集まりました。

音楽はもちろんのこと、敦賀の食文化も堪能できる音楽フェス。訪れた方々にとって、音と食を満喫する2日間となりました。



オーケストラ・アンサンブル金沢 & 今川裕代コンサート

オーケストラ・アンサンブル金沢 & 今川裕代コンサートが、令和7年10月26日（日）に、若狹町のパレア若狹で開催されました。この催しは、パレア若狹の開館20周年を祝うイベントとして開催されたものです。

若狹町出身のピアニスト今川裕代さんがソリス・トを務め、指揮者の末廣 誠さんのもと、オーケストラ・アンサンブル金沢が素晴らしいハーモニーを披露しました。プログラムには、ベートーヴェンの名作が並び、特に「ピアノ協奏曲第5番 変ホ長調『皇帝』」では、今川さんの卓越したピアノ演奏が会場を魅了しました。

会場を訪れた人々は、オーケストラの力強い演奏と今川さんの繊細なタッチに心を奪われていました。



げんでんふれあい講演会

令和7年10月18日（土）に敦賀市のきらめきみなと館で、げんでんふれあい講演会を開催しました。講師は、俳優、気象予報士の石原良純さん。講演のテーマは「石原良純、大いに語る!! 石原家の家族愛&自然への想い」でした。

「子育てに興味がなかった」「結婚披露宴では、後ろの隅でなく、もっと良い席に座りたい」など、父慎太郎さんの破天荒なエピソードが語られました。

又、子どもの頃に、自分が住む街の両側の山の上には雲ができるのに街の上には雲ができないことを不思議に思ったことやその疑問を解消すべく気象予報士の黎明期に試験を受けて合格したこと、気象キャスターを引き受けることとなったきっかけなどの興味深いエピソードも語られました。

講演後は会場から多くの質問が寄せられ、県内各地から会場一杯に詰めかけた約230人の石原良純ファンは、充実した時間を過ごしていました。



げんでんふるさと大賞 写真コンテスト入賞作品展

令和7年11月16日（日）から30日（日）まで、敦賀市本町のげんでんふれあいギャラリーで、第19回げんでんふるさと大賞2025写真コンテストの入賞作品展を開催しました。

会場には、応募作品190点の中から選ばれた、ふるさと大賞1点、ふるさと賞1点、優秀賞4点、協賛社賞3点及び入選20点、計29点の作品を展示しました。

福井の自然、風景、伝統行事などが心豊かに表現された写真に、多くの人が見入っていました。



敦賀市女性の会講演会

令和7年4月26日（土）に敦賀市の西公民館で、敦賀市女性の会と共催で講演会を開催しました。

講師は、平成14年に石川県で初の女性外来を開設し、現在、金沢医科大学総合内科科学臨床教授、女性総合医療センター長を務める医師の赤澤純代さんで、テーマは、「人生100年時代 血管から健康を考える」。

講演会では、30秒でできる毛細血管の血流チェックやゴースト血管がどうか、女性にとって特になる顔のむくみの改善方法や、炭酸水や柑橘系の果物を絞って飲むことで腸内細菌が整えられることなど興味深い話が続き、来場者65名は、メモを取りながら耳を傾けていました。

講演終了後も質問が途切れず、健康に関する関心の強さが伺われる大変有意義な講演会となりました。





財団 ふれあい 通信

令和8年度の助成事業を募集しています

令和8年度において、地域文化の振興、青少年等の人材育成、ふれあい及びゆとりの創造を目的に行う活動に対する助成を受けたい団体を募集しています。

対象となる活動

- ◎地域文化の振興、青少年等の人材育成に関する事業
 - ・ 市民文化・市民芸術活動
 - ・ 地域文化の継承活動
 - ・ 伝統芸能・伝統行事の保存と継承者の育成
 - ・ 郷土史の研究活動及び文化遺産の伝承活動 など
- ◎ふれあい及びゆとりの創造に関する事業
 - ・ 芸術公演、展示の開催 など

対象となる団体

- 1 福井県内に活動の本拠を置く団体
- 2 構成員(会員)が、20名以上の団体
- 3 令和8年4月1日現在で、設立後2年を経過している団体

助成割合及び限度額

- ・ 助成割合 1 / 3 で限度額 30 万円 又は 助成割合 10 / 10 で限度額 10 万円
- ※「助成割合 10 / 10 で限度額 10 万円」は、令和8年度からの新制度です。

応募方法

- 応募要領別表に記載する推薦団体の推薦書を添付して、助成事業申請書等を提出して下さい。
受付期間：令和7年12月10日(水)～令和8年2月10日(火)16時必着
- 上記以外にも、助成申請にあたってご注意頂きたい事項があります。
詳しくは、ホームページ (<https://www.genden.or.jp/grant>) をご覧頂くか、
げんでんふれあい福井財団 (☎0770-21-0291) にお問い合わせ下さい。



↑詳しくは
コチラ

